

正宗白鳥

尾崎紅葉について



# 尾崎紅葉について



私は、森川町の下宿にいた時分、ある夜、『趣味』という雑誌の編集者であった西本波太という人に誘われて、二葉亭四迷を訪問したことがあった。その時の断片的談話は私の心に深く刻まれていて、今も二葉亭の面影とともに、それらの談話が、歴史的興味をもつて思い出されるのであるが、その時には紅葉山人に関しても、一言彼れの感想が洩らされたのであった。

「新しい時代の作者のものを推讃するのはいいが、そ

のために過去の作者の価値を無視しなくつてもよかるう」といって、彼れは、紅葉の小説には、時代の変遷に關らず、紅葉としての独得の妙所を持っているという意味の批評を述べた。この簡単な評語は、当時の私をして奇異な思いをさせた。自然主義全盛の時代で、紅葉はじめ硯友社一派の文学は古くさい低級な文学として、文壇の新人にはいたましく蔑視されていたので、露国の大文学に熟通している二葉亭の如きは、無論紅葉などの遊戯文学に同感をもつていようはずはないと、私は独り極めに極めていたのであった。……今から思うと、二葉亭が

紅葉の小説に好意をもっていたのは不思議はないので、二葉亭はロシア文学の感化を受けて、『浮雲』のような異った小説を書いたり、人生問題に煩悶したりしたもの、根柢には紅葉などと似寄った旧日本の文学趣味を湛えているのだ。二葉亭ばかりではない。もっと時代の若い人々でも、紅葉と似通うような文学趣味を隠然持っていることは、今なお旧歌舞伎劇が、何とか理窟をつけながら、喜ばれているのと同様である。日本人は日本人である。祖先以来の伝統的趣味から全く脱却することは出来ないのである。

自然主義勃興以来、紅葉山人は文壇的には虐殺されながら、世上の小説好きには相変らず喜ばれていたらしい。それも、蘆花、浪六なみろくあるいは天外諸氏の小説とは異って、読者が各方面に渡っているらしい。彼れと、後年の漱石との芸術とは最も日本人の趣味に適しているのである。そして、それは必ずしも通俗呼わりすべきものではないらしく、鑑識の傑すぐれた文壇の諸氏が、近年紅葉讚美の語を放っているのが、おりおり私の耳に触れるようになった。芸術に対する毀誉褒貶きよほうへんの変遷は面白い。……数ヶ月前の『新潮』の合評会にも、紅葉や一葉の噂が出て



いて、秋声しゅうこう秋江の諸氏が紅葉をひどく推賞していた。

谷崎氏が紅葉を世界的文豪として奉っているという噂も出ていた。歳を取ると、現在よりも過去がよく見えるものだが、「あの紅葉」の小説がそんなに傑れているのであろうかと、私は疑いながら、新たに彼れの全集を読み直そうと思い立った。

私は、少年の頃『拈華微笑』ねんげみしやうを読んで以来、紅葉山人の作品は殆んど全部読んでいると行っていい。二、三度繰り返して読んだものもある。『隣の女』の如きは、退屈な時にたびたび取り出して読んでは、面白がって独り

笑いを浮べた。しかし、紅葉の作品に対して敬意を表したことは一度もなかった。「小説というものはこんなものである。おれには書きたくも書けないだろうが、書かなくてもいい」と、いつも思っていた。だから、私が十年も早く生れて、硯友社全盛期に成人していたなら、決して小説家として身を立てようなんて、柄にないことを思い立ちはしなかったであろう。

明治二十九年の二月下旬『多情多恨』が読売に出かけた頃、私ははじめて上京して、横寺町の下宿に、いわゆる草鞋わらじを解いたのであったが、間もなく、町内の古ぼ

けた共同門に「尾崎徳太郎」という表札が出ているのを、散歩の途中か、湯屋通いの途中に見つけたので、これが、有名な紅葉山人の住所であろうかと疑って、同宿の友人に訊ねたが、法律書生であつた友人は、そんなことは知らなかつた。数日経つて、田舎の知人から紹介されていた戸川残花翁ざんかを、薬王寺町に訪ねた時に、かの表札について訊ねると、翁は、「それが紅葉の家だ」と答えて、「文学者は皆みんな貧乏だ」と、その実生活についていろいろ話してくれた。私は、当時文学を志望していた訳ではなかつたので、貧乏と文学の関係についてさして感激

もしなかった。

私は文科に籍を置くようになっても硯友社は好かなかった。早稲田卒業後二、三年の間に、他所ながら紅葉山人の風<sup>ふう</sup>豊<sup>ほう</sup>に接したことは、四、五度に及んだが、敬意を寄せて凝視したことは一度もなかった。しかし、青春の頃眼前を横切った、明治時代第一の人気作者紅葉山人の通人らしい面影を、今思い出していると、彼れの全集を讀みながら、追憶の興味が添って来るのである。

早稲田卒業直後、出版部に奉職して間のない頃、牛込の明進軒で編輯会議があつて高田坪内両博士も出席さ

れ、会議後晚餐を饗せられていると、そこへ、脊のスラリとした瘦男が筒袖のような身装みなりで、階子段を上って来た。扉が開いていたので我々の部屋へ目を注いだようであつたが、ふと高田博士と目を見合せて互いに目礼した。

「尾崎君じゃないか」と、坪内博士が顧みて声を掛けた時には、その人は向うの部屋へ入っていた。「横寺町の先生はこの頃よくいらっしやるのかね」と、高田博士は給仕女に訊ねた。「紅葉という人はああいう人か」と、私は意外な感じがして、その書生書生した影を心に留めた。当時の私は、十五円の月給に有りついて、面白くも

ない文科講義録の原稿集めや校正をやっていたので、小説のようなむつかしいものを書くとういう大それた野心を抱いてはいなかった。講義録の余白へ気紛れに「文芸時評」を書いたりしたが、無論しつかりした文学上の見識があつたのではないので、空疎な評語を並べたに過ぎなかつた。硯友社系統の作品は大抵罵倒したように覺えているが、非難攻撃の依りどころは、彼らに思想がないということであつた。実人生について經驗乏しく、芸術の鑑賞力の浅い批評家が、尤<sup>もつと</sup>もらしい文学批評を捏ね<sup>こ</sup>上げるには、思想の有無を持ち出すのが、一番樂であつ

て、檻樓ぼろを出さずに済む訳なのだ。その頃露伴の小説には思想があつて、紅葉のには思想がないといわれていたようであつたが、露伴にどんな思想があつたのであろう。『一口劍いっこうけん』には、「精神一到何事かならざらん」という思想が現れているから、紅葉の『おぼろ舟』の如き、情緒のみ現れている小説よりも傑れているといつたのであるか。

二度目に、ちらと紅葉の影を見たのは、赤城下の清風亭で、「高等講談」と称して、文学者が自作の上品な講談を自演した時であつた。私が聴きに行った時は、その

二回目か三回目かで、江見水蔭氏えみすいいんのあまり面白くない話を聞かされたのであったが、氏の話の済みかけた時分に、紅葉が庭から入って来て、水蔭氏を招いて一緒に出て行った。「ああ紅葉さんが来た」と、私の側にいた聴衆は、みんなそちらへ目を注いだ。「茶碗割」や『短慮の刃』は、この高等講談会で述べられたので、やはり誰れのよりも紅葉のが面白かったらしい。

三度目に、私が紅葉を見たのは、池ノ端の無極亭で、久米八門下の踊りの会のあった時であった。私は徳田秋江君などと一しよに出掛けて、坪内博士のほとりで見物



していたが、その会へは紅葉山人も来ていて幸堂得知翁こうどうとくちと並んで話をしていた。そこへ遅れ馳ばせに鏡花氏がやつて来たが、座席の斡旋をしていた中年の女が、「先生のお側へいらっしやい」というと氏は礼儀正しくもそちらへ寄って行った。私などのように、先生の側で胡坐あぐらを掻いたりなんかしなかった。間が隔っているので、彼らの話声はよく聞えなかったが、ただ、紅葉が鏡花氏に向つて、「お前が……」「お前が……」といっているのが耳に留った。そして、話は聞えなくても、両氏の態度を見ているだけで、師弟対座の光景が映画の如く浮んだ。一

人が師の態度を崩さなければ、他の一人も弟子の態度を破らなかつた。『青葡萄』に書かれている師弟関係が思ひ出された。

四度目、すなわち最後に紅葉を見たのは、島村抱月渡欧の送別会の席上においてであつた。私は、開会前から会場の紅葉館に来ていた彼れが女中から飴みたいな菓子を買つて、それを口に含んで、片膝を立てて座している彼れを見た。発起人を代表した彼が送別の辞を述べるのを聴いた。それから、広津柳浪氏が、当時『無花果<sup>いちじく</sup>』の作者として声名を博していた中村吉蔵氏を紅葉に紹介し

ているのを見た。この各方面の重立おもだった文学者の集った会場においても、紅葉は特に文壇の第一人者らしく、あたりの人々に取り扱われているのを、私は見た。彼自身もそれを当然としていているらしく振舞っているように、当時の私には思われた。彼れは文章のためには苦心焦慮し、ことに最後の大作『金色夜叉』のためには天寿を縮めるほどの思いをしたのであろうが、また物質の不足に悩まされたこともあるうが、自己の名声はあくまで楽しんでいたいに違いない。彼れの作物がそれを証明している。彼れには、二葉亭や透谷や独歩や、あるいは檇牛なども持つ

ていたような人生苦を感得したことはなかったに違いない。彼れの作物がそれを証明している。彼れは解決の出来ない人生を持っていなかった文学者の一人である。

私は、この一代の才人であった紅葉山人を、他所ながら瞥見しただけで過ぎたのであったが、抱月渡欧の翌年、読売新聞に入社したために、彼れに対して多少の掛り合いがつくようになった。私の入社後間もなく山人は逝去した。彼れは長い間自己の作品を発表した読売とは縁を切っていたのであったが、過去の深い関係からいっても、また彼れの文壇における功績からいっても、その伝記や

逸話を紙上に掲げるのは、当然為すべきことのように思われたので、私は主筆に進言して、自分でその記事を集めようとした。それで、まず柳浪氏と眉山氏とを訪問したのであったが、二人とも紅葉に関する話は一切避けて、私の力ではどうしようもなかった。変に思って、私の読売入社当時に紹介の労を取ってくれた石橋思案氏を博文館に訪問して訳を訊こうとしたが、氏は不在であった。一日駆けずり廻って何の得るところもなかったのを忌々しくも思い、主筆に対しても申し訳がないように思って、社へ帰ったが、すると間もなく、思案氏から電話が掛つ

て来た。……その時の荒っぽい氏の口調は私は今でもよく覚えている。「君は紅葉のことを聞きに来たんでしようが、そのお話は出来ません。君には何も関係がないのでお気の毒だが、読売新聞は紅葉を虐待して苦しめたのだから、我々友人は、読売には断じて筆を執らんことに決議をしているんです。無論話をする訳にも行きません。」

率直な思案氏の言葉によって、私は柳浪眉山両氏が、気の毒そうな顔をして話を避けていた理由が分った。「そういう訳なら、此方でも書く必要はあるまい」と、主筆

も承知して、私も重荷をおろした気になったが、しかし、全然知らん顔をする訳にも行かなかったので、私の筆で十行ばかりの弔詞を書いて、肖像とともに紙上に掲げることにした。読売はあれで済ませるのかと、紅葉に対する冷淡な態度を非難したものもあったが、こちらが冷淡であったのではない、先方からそう仕向けたのだ。……とにかく、まだ一篇の小説も書かなかった前に、明治文壇の第一人者尾崎紅葉追悼の文章を、たとえ十行でも執筆して、当時の文学新聞に掲げることが出来たのは、私に取って名誉であった訳だ。

私はかねて、『心の闇』と『多情多恨』とを、紅葉全作中での最も傑れた者として心に留めていた。『金色夜叉』の如きは、『不如帰』『魔風恋風』などと同列に論ぜらるべき通俗小説であると思っていた。ところが、今度全部を通読して見て、そうとばかりはいえないことを知った。文学者としての紅葉、人としての紅葉を研究するためには、『金色夜叉』をこそ選ぶべきである。馬琴を研究するには、『弓張月』や、『美少年録』や『侠客伝』よりも、『八犬伝』を選ぶのが当然であるが、『金



色夜叉』は紅葉山人の『八犬伝』といっているののである。

……私は今度この未完の長篇を読んで、ただに紅葉の文学的技倆を充分に窺い得られたのみならず、世上の小説愛好者の心理をも察することが出来た。明治時代の世相の一端をも窺い得られたし、もっと広い人生と文学とに思いを馳せて感慨に耽ったのであった。時代精神捕捉の必要を教説した高山樗牛は、『金色夜叉』を罵っていたが、しかし、この長篇には、日露戦争前の時代の精神や時代の苦悶が、自から作中に現れているではないか。作者はそれを意識して書いてはいないのだが、意識してい

ないところに、むしろ妙味があるのだ。今日のプロレタリア文学主唱者が、粗雑な理窟を作中に並べて、それで時代を批判したつもりでいるのをこそ晒わらうべきである。

『金色夜叉』について所感を述べる前に、私は彼れの他の作品について、些少の批判を試みようと思う。

『新色懺悔』いろざんげはいうまでもなく、『伽羅枕』きやらまくらなども、

西鶴その他の旧文学をお手本として、一生懸命お化粧をした習作であるが、それら初期の作物のうちでは『二人女房』と『三人妻』とがいい。『金色夜叉』に到達するまでの紅葉の素質が、この二篇に充分に現れている。私

が今座側に備えている春陽堂新刊の「紅葉全集」には『二人女房』が含まれていないので、たしかなことはいえな  
いが、この小説には、あり振れた人情が、分り易く、あ  
たり前に書かれている。平凡この上なしの小説であるが、  
常識的で健全で、人生世相に暗い影を見ないところが、  
紅葉の特色であり、一般の読者が彼れの小説を喜んだ所  
以である。この小説の現れた時、依田学海翁が作者に向  
って、「甚だ面白い、後生恐るべし」と激賞したのに対  
して、作者は、「いや、まだ駄目です。四十にもなつて  
頭に白髪が出るようになったら、実の入ったものが書け

るでしよう」と答えたことが、作者苦心談の中に出ていた。二十を過ぎたばかりの若年が、学海翁の如き老人をも感動させるような小説を書いたことは、今から見ても不思議なように思われるが、これは必ずしも紅葉が非凡な秀才であつた証拠にはならないのだ。紅葉は青年の頃にも、当時の一般人が見ている通りに人間や世相を見て、道徳観や世間智が俗人と同様であつたから、世の老若男女に受け入れられ易かつたのだ。二人の女を取り扱うにも型の如く筋を運んで行くのだから、作者も書き易かつたに違いない。二葉亭の『浮雲』にあるような深入りし

た心理に突込んでいるのでなくって、腕を見せるのは文章の綾にあっただけなのだ。

『三人妻』なども、徳川時代の文学の連続と云うていいもので、文章にも着眼にも新時代の色彩の乏しいものであるが、しかし、『三人妻』は傑作である。緑雨の『かくれんぼ』の比ではない。

私は、西鶴の『一代女』や、荷風の『腕くらべ』や、里見弴の『今年竹』など、溫柔郷裡の消息を伝えた古今の名作を、『三人妻』に比べて見た。『三人妻』には、『腕くらべ』に漂っているような哀愁がない。近代的哀愁と

も名づくべきものが読者の胸に迫って来るのが、荷風の作品をして硯友社の作品と趣を異にさせるので、『三人妻』にはそういった感じは含まれていない。紅葉の年齢がまだ若かった時分の作であるためでもあるだろうが、色っぽい興味にのみ駆られてにが味いはどこにも加味されていない。三美人の風姿をそれぞれに描くとともに、個性をも書き分けたつもりなのであるだろうが、それは型の如くである。花柳界見聞録たるに過ぎぬ憾うらみのある『今年竹』の方が複雑な現実味を持っている。……しかし、『三人妻』は、一つの磨かれたる璧である。旧文学伝来の豊

艶なる文字で色取った浮世絵である。西鶴を真似て筆致に斧鑿ふさくの痕のある『伽羅枕』よりも渾然としている。こういう種類の文章としては、徳川時代の小説にも類のないほどの名文である。こういうものを読むと、紅葉は、新時代の先駆者ではなくって、旧文学に最後の光を放った名作家といった感じがする。それは先代菊五郎が歌舞伎の形式美や情緒を継承して、旧い世話物役者として最後の光を放ったのと似通っている。そして、菊五郎は旧技巧家として、最後の一人であったのみならず、徳川末期の名優にも勝っていたように想像されるが、紅葉もそ

うであつたのだ。

『三人妻』などは、文章美において、旧作家を圧しているが、内容は、『梅暦』や『娘節用』などの人情本と同じなのだ。紅葉の持ち味は、『三人妻』から『金色夜叉』に至るまで失われていない。『三人妻』の葛城余五郎は、大成金であつたため、自分の心に適った女を自由に手に入れて、色の楽みに耽つて、人生の幸福此処に在りと満足していたのであるが、薄給の勤人で、容貌も醜かつた粕壁かすかべゆずる讓（『隣の女』の主人公）は、その満足の得られないために焦慮した。この『隣の女』くらい、紅



葉の主観を知り、作風を知るに都合のいいものはない。

「媒妁なこうどに妻もらわせられた嫁、好加減に極めた縁談、親など

に勧められた女房、そんなのは粕壁讓の最も屑いんぎょしとせ

ざるところである。……相互に心が知れ合って、添おう

添いましょ。死ね死のうというほどの間でなければ、夫

婦になるべき必要がない」というのは、何も粕壁に限つ

たことではないので、今日は、これを真剣な恋愛のない

結婚は虚偽な結婚であるなどと、むつかしい言葉で言い

現すだけの相違であるが、粕壁讓の理想の色調は、「あ

ちらからもこちらからもやいのやいのといわれる唐琴屋からことや

丹次郎」となることにあるのだ。作者紅葉は、理想の充たされない粕壁の苦悶を取り扱うのに、歐洲近代の作家及び、その流れを汲む現代日本の作家のように真面目な同感を寄せないで、揶揄し翻弄しているのであるが、それに関らず、紅葉本来の趣味は、唐琴屋の若旦那の趣味と同じ色を帯びているのだ。「何だ男のくせに」といった調子で粕壁などを罵倒して、上べに凜りんとしたところを見せながら、内実丹次郎の影に憧れているのは、多数の世人と同様なのだ。本筋では粕壁の悲観焦慮空想を写しながら、影では、その隣りの一室で「隣の女」お小夜さよが、

その旦那らしい好男子と駄洒落まじりの口説くぜつをかわしたり、あるいは情夫の巡査と痴話喧嘩をしたりしているところを描いたりしているのは、現実と理想を対照させているようなものだ。紅葉の小説が、多数者に愛読され、今もなお、かなりの愛読者を持っている理由の一半はそういう点にあるのであろう。単なる『梅暦』ではあまりに低級で、普通の読者の道義観が満足されない。それで、「何だ男のくせに」という凜とした道念を加味しながら、春色『三人妻』 春色『隣の女』を書いたのが、学海翁などの通俗的知識階級の読者にも喜ばれた所以であろう。

狂訓亭紅葉である。無論文才においては為永春水などは紅葉に比較さるべくもあらず、永井荷風とても遠く彼れに及ばないのである。

『金色夜叉』を、失恋の悩みを描いた小説とのみ思うのは浅薄である。間貫一は、はざまかんいち紅葉全作中でも類を絶している色男なのである。粕壁讓をして羨望し、すいぜん垂涎三尺たらしむるに足る幸福人である。読者の興味の一半はそこにあるので、お宮は雑作なく悔悟して、命を掛けて慕い、満枝は満枝で、振られれば振られるほど恋い慕っている。幾多の青年読者が、自己を貫一の境地に置いて恍

惚としたことであろう。読者心理からいえば、光源氏も『紅楼夢』の賈宝玉かほうぎよくも『一代男』の世之介も、『梅暦』の丹次郎も、及びもつかぬ色男は貫一なので、失恋の悩みを言い訳に、終いまで女に捉えられぬところが、読者をじらして、読者の好色的情緒をそそる所以である。

作中のいろいろな男女のうち、赤檉あかがし満枝は実によく書けている。『二人妻』のお才などよりも一層具象的に、豊艶なる肉体が紙上に躍動しているのは、歳とともに紅葉の技巧が進んだ証拠である。面白いのは色の口説である。西鶴時代の大まかなものから、『梅暦』時代の舌つ

たるいところ、紅葉を経て、現代小説のハイカラな恋愛問題に至るまでの変遷を比べて見ると面白い。そこにも時代相が現れているのである。

長篇の構図を定める腕前は、紅葉でも得意ではなかった。『金色夜叉』も、通俗小説として、読者の好奇心を惹く用意はあまり周到でない。次第にだれて来ているのだが、荒尾や満枝の挿話によって僅かに興味をつないでいる。それにしても、貫一が千葉行の際に、両国駅前の休憩所で、仲のいい男女の秘密話を立ち聞きして自分の身に引きくらべて感慨にふけり、塩原の宿で、

また仲のいい男女の情死の相談を立ち聞きして飛び込んだりするのには、知慧のない趣向である。しかも、女の方が、富山の思いを掛けていた女であったなど、故事つけの苦しさが思われる。

由来糾葉は常識的の作家であるため、貫一の人生に対する憎悪感が甚だ不徹底である。風早蒲田かざはやかまだなどの旧友の懇請を斥しりぞけて飽くまで高利を貪らんとする凄味を現しているところもあるが、随所に弱々しい人情がつきまわっていて、夜叉らしい強味はあまり現れていない。荒尾に対するところもそうであるし、情死の計画者を救うあ

たりは、まるで平凡な人情家である。私はその点で、読  
みながら紅葉の不徹底さを齒痒はがゆく思った。

しかし、紅葉が自己の天分と蘊蓄うんちくとを傾注した小説は  
『金色夜叉』である。『三人妻』や『多情多恨』のよう  
に完備したものではなくって、どんな批評家からも非難  
されそうな欠点を有っているのであるが、彼れとしては、  
最も面倒な題材にぶっつかって芸術的奮闘を試みたの  
で、脳漿を絞り尽して、倒れて止むといった悲壮な感じ  
がされる。それで彼れは自己の有っているあらゆる物を  
投げ出している。継ぎはぎではあるが、それらの継ぎ切



れのあるものには、一代の才人の織った錦繡きんしゅうの美を表わしているのだ。『金色夜叉』は紅葉の作中では唯一の劇的効果を有っているので、『不如帰』とともに、早くから新派劇の売物にされ、大学生が劇場に親しむようになったのは、『金色夜叉』が本郷座で上演されたためであるといわれるほどに、その芝居は世俗に歓迎されたのであるが、それは紅葉の芸術に取ってはいいいことではなかった。私は当時劇評をやっていたので、高田実の荒尾や藤沢浅二郎の貫一などを見せつけられたが、その記憶が、この小説の鑑賞においてどれほど邪魔になったか知

れないのだ。小説の筋立てに芝居がかつた不自然さがあるにしても、ああわざとらしいお芝居にされて、しかも薄汚く蕪雑ぶざつに振舞われては、原作の名文章が泥土に委されたようなものだ。『金色夜叉』が最も広く流布しているとともに、紅葉の作中の最も卑俗低級なもののような印象も我らに与えているのは、新派劇の罪なのだ。

しかし、この芝居が大学生など青年男女から異常な歓迎を受けたことも時代の風潮と関係がある。旧文学の戯作者気分で筆を執っていた紅葉も、知識階級の青年を主人公として、新時代の悩みを写すようになった。それが

不徹底であつても、我々はそこにあの時代の影を髣髴ほうふつと思ひ浮べることが出来るのである。春のや主人の『書生気質』の学生は、文明開化の空気に浴して、ふわふわと気楽に生きていた。それが、『金色夜叉』では、不徹底でも何でも、どうかしななければならぬといつたような時代の苦しみが出ていたのだ。明治の新日本もボンヤリしていられなくなつた。同じように貧乏であつても、学生や若い女の生活難や金銭慾に対する感じが鋭敏になつている。富山のような富者に対する反抗と羨望、青年男女の満たされない望みが、在来の小説とはちがつて、尖

って出ているのである。新時代の色男男としての貫一を  
取り扱って、読者を喜ばせようとしていながら、作者は  
不用意のうちに、時代の影をも写しているのだ。自然主  
義以後の作家のように、紅葉には自覚とか自意識とか名  
づくべきものはなかったのであるが、彼れはこの最後  
の大作に取掛っている間には、創作上の苦悶があつたに  
違いない。そして、その苦悶には私はいたましく同感す  
るのである。

貫一の失恋の苦をこれでもかこれでもかかと書き続けて  
いるのが、深く掘り下げているというよりも、多くは「く

どい」と感じさせられるのだが、名作『多情多恨』だつて、くどいことは随分くどい。

四十にもなったら実の入ったものが書けるだろうと、若い時分に述懐していた紅葉山人は、四十未満で逝去した。老大家のように思われていた彼れも、今の私の年齢よりは十歳も若くて死んだのである。世態人情に明るかった彼れの言説も、今から考えると未熟に思われるのも止むを得ない。『新著月刊』という雑誌に掲げられ、後日『唾玉集』<sup>だぎよくしゆう</sup>(?)と題して出版された宙外青々園二<sup>せいせいえん</sup>

氏の文集のうちに収められている宙外氏筆記の名家苦心談（それは前代の諸作家の文学観人生観を何うに甚だ便利なものである）や、明進軒会食後の雑話によつて、我々は紅葉の創作の用意や世間智を直接に知ることが出来るのであるが、それは、極めて常識的で、緑雨や二葉亭の所説にあるような鋭利な観察や不安な懷疑は全く見られなかつた。恋愛や家庭生活についても、いやに老成ぶつた態度で子弟に教えを垂れていたが、『金色夜叉』などを讀みながら、私が気づいたところによると、紅葉でも、青春期を過ぐるにつれて、創作その他の事について疑惑

の念が湧いて、いろいろに悩んでいたのである。ただ、一代の大先生として奉られていた自己の内兜うちかぶとを子弟や世人に見透かされまいとして、努めて老成ぶった態度をもち続けていたのであろう。三十にも達しないうちから大家に成りすまし、ことに門下生をつくることなどは、自己完成の上に決していることではない。

『青葡萄』は、紅葉全集中唯一の、事実直写の小説であって、これによって彼れの日常生活の一端が窺い得られるのである。それに、言文一致体の文章はこの一篇において最もよく調ととのっている。『金色夜叉』などの会話

は、純然たる写実とはいわれぬのだが、『青葡萄』は事実の直写であつたために、会話が自然であつて生動している。紅葉も生き永らえていたら、『青葡萄』の文体を押し進めて、新時代の文学へ入つて行つたかも知れないが、あるいは従来維持していた大家の格式を崩すのを恐れて、徒いたずらに神経を悩ましたかも知れない。……どちらにしても、紅葉は露伴氏とは違つている。『青葡萄』では、人の師としての紅葉が、門下生に対して威厳と情味とを兼ね備えていたことがよく現れていて、文壇における彼れの実際的勢力の大であつた原因も察せられる



が、文学の上からいえば、こういう師匠を頂くことは弟子として幸福ではなく、師匠自身に取ってもいいことではあるまい。文学においては、飽くまでも自己の天分を發揮すべきもので、師匠の束縛なんか受けてはたまるものでない。好んで人の師になるものも愚かであるし、進んで人の弟子になるものも愚かである。

二葉亭、透谷、独歩などには、将来の文学の萌芽が宿っていたが、硯友社の文学にはそれがなかった。旧文学の衣鉢を襲<sup>つ</sup>いだのに過ぎなかったが、しかし、紅葉山人だけは、作品の価値からいっても、日本文学史に立派

に跟あとを留むべき傑れた作家である。言文一致の文体を完成するに努力した一人であるのみならず、その作品のある者は、古来の日本文学の傑作に比して、決して劣るところはないのだ。

紅葉以外の硯友社の作家と作品とを、今記憶を索って思い浮べると、広津柳浪氏の『今戸心中』その他二、三が、今読み返しても見褪めがしないだろうと思われるばかりである。時として紅葉以上の評判のあった川上眉山の作品も、私には深い印象を留めていない。……そう思うと、十数年の間小説壇を独占していた硯友社も、内

容は甚だ稀薄であつたように思われるが、しかし、あれほど旺盛だつた自然主義の作品のうちにも、今になつて顧みると、どれだけいいものがあつたであらうか。いつの世の芸術でも、時日の篩ふるいにかかると、残るものは幾つもないのが当然なのだ。（九月十九日、大磯にて）



日本文学電子図書館

---

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
2002年6月14日 第1刷

---

日本文学電子図書館